

第二十四番目の if = 「修身教授録」について

さて以上拙著のことについて述べたので、ついでに「修身教授録」についても述べることとしよう。というのも、この「修身教授録」は私があらかじめ意図した書物ではなくて、全く自然に授かったものと言って良い。というのもそもそもこの「修身教授録」は、私が天王寺師範の専攻科で、一時間教授時数が余ったゆえ、本科の三年生の「修身科」の授業を持って貰えないかとの教務の言葉に、それを受諾したから始まったのである。

さて「師範修身書」という教科書を受けて見ると、紋切型の味もそっけもないものであった。即座に教科書を使わない授業をすることにしたのである。

かくて毎時間、その時私にとって一番切実なる「テーマ」を掲げて、それについて話すことになったわけである。ところが問題は、こうしたやり方をして困ることは、一年間の計画が立たないのみか、一か月であっても、あらかじめ計画を立てることは不可能である。よって「かかるやり方は出たところ勝負の気まぐれ授業となる」との非難に対しては、何ら弁明の途はなかった。されど毎時間その時その時に、最も切実なテーマを掲げることには長所のあることはいうまでもなく、結局私の落ちついた方法は、全員に筆写のできる様な速度でゆっくりと話して、全員に筆写させる方法に落ち着いたのであった。

されば私は、たとえ督学官の視察のあるときも、その日だけは教科書を持って来させて、それで授業をする……というようなことはせず、平素のやり方で押し通すことにしたが、何しろ戦前のことだから、累が校長に及ぶことを恐れて、当日の朝早く校長の出勤前に、比較的良く筆写されたノート三、四冊を校長の机上に置き、平然として平素の如く授業したが、後何の咎めもなかったのである。

然るにその後、その筆記の一部をプリントしたものが、芦田恵之助先生のお目に止まり、それからして当時出版業をしておられた、御長男の公平さんの手により、全五冊の「修身教授録」として刊行された。それは芦田先生の非常なるご支援により、全五巻で計十万部が出て、戦前の隠れたベストセラーと称せられた。尤も最初からの約束にて、(1)「無印税」但し、(2)必ず全五巻刊行との約束であったが、それは全く無名の一地方師範の教師たる、我が身の分際を心得えたが故である。

然るに第二巻の刊行に前後して、私は旧満洲国の建国大学に赴任することとなたがため、かれこれ互響したのだろうか、私はそれまで全く無名の一地方師範の教師であったのに、一躍、全教育界にその名を知れるように到ったが、それはひとえに芦田先生のご懇情によるものと言うべく、もしこの事が無かったならば、たとえ前掲三冊の書を出したにせよその後の私の辿ったような運命の道は、絶対に開けなかったと言ってよい。